



社会福祉協議会「椎名だより」

平成29年度 第3号 (通算18号)



発行者：千葉市社会福祉協議会椎名地区
 編集者：千葉市社会福祉協議会椎名地区 広報委員会
 代表 岡本 博幸 〒266-0021 千葉市緑区刈田子町 28

千葉市社会福祉協議会
 マスコットキャラクター
 ハーティちゃん

第29回椎名地区『福祉・コミュニティまつり』

平成30年2月11日(日)春を思わせる暖かい日、第29回椎名地区『福祉・コミュニティまつり』が椎名小学校講堂で、椎名地区の社会福祉協議会・地域の役員・ボランティアの方々・椎名小の先生方のご協力によって開催されました。その様子を写真で紹介しします。ご協力感謝申し上げます。 **岡本 博幸**



①提供品が体育館に運ばれてくる
「たくさん提供してくれました」



②善意の提供品に感謝
「並びきれないほどの品々」



③買いやすいように小分けに
「新米、こぼさないように」



④このくらいでよいか
「たくさん銀杏大変だったろうな」



⑤いくらにしようか値札の相談
「今年の新米、おいしいよ」



⑥値段つけは大変
「高い?安い?さて、いくらにする」



⑦中身は何だろう
「まとめて買ってもらう」



⑧陳列はこれで大丈夫
「傷物はないかな、値段は?」



⑨販売開始。お客様の品定め
「もっと安くならないの」



⑩日用品はまとめて買っておう
「有難う、安くしておきますよ」



⑪役員さんの「トン汁」づくり
「今年の味は上等でした」



⑫トン汁売れ切れ
「最後の一杯完食。ご協力感謝」



⑬ハイ。200円。おつり50円
「裏方さんご苦労さん。売り上げは?」



⑭あんしんケアセンターの健康相談
「脳年齢30才。20歳若いですよ」

平成29年度「福祉・コミュニティまつり」 収支会計報告(2月25日)

収入 139,720円

・バザー売上金 139,720円

支出 58,216円

・事務費 2,188円

・事業費 56,028円

差引残高 81,504円

・地区部会会計(高梨夏江)へ

ものがたり

七廻塚の伝説には「韓姫には七人の姉妹がいて、亡くなった後も北斗七星のように仲良く結びあつて輝き、私たちを見守つてくれているのだという」言い伝えが残っていました。そのため若者達は願い事を叶えたいときは、七回廻つて機織りの音を聞いたということでありました。北斗七星は宇宙の神と崇められていたからでした。

「スー・トントン・スー・トントン」が聞こえると

「布を織ることが上手になる」

「着物を上手に縫うことができる」

「願っていた人の所にお嫁に行くことができる」

と、いう言い伝えが村々に伝わっていました。

村娘たちは古墳の周りを一回まわつては野の花を添え、一回まわつては野の花を添え、願い事が叶うように廻りました。七回廻つて聞くことができると、思いを秘めて家に帰りました。

韓氏一族には父母と七人の姉妹がおり、堅穴の住居でつましく暮らしていました。朝鮮の百済にいた頃は、高い身分の家柄でしたが、ここ麻績の地では質素な暮らしをしていました。国司からも大切にされていました。

一族は麻の栽培から布を織るまでの技術を持っていました。韓一族はこの地で一生をすごすと決めていました。そのため、村びとのために織物技術を伝え、共に生きる道を選びました。それが麻の栽培と機織り技術でありました。

この里は、温暖で地味に肥えており、麻の栽培に適していました。栽培は大麻(たいま)と苧麻(ちよま)の栽培から始めました。韓姫を始め六人の姉妹は村の娘たちに丁寧に教えていきました。

①麻の栽培の方法②樹皮の剥がしかた③池の水に浸す日数④もみほぐしかた⑤水でのあらひさらしかた⑥乾燥のさせかた⑦麻を細くほぐしかた⑧ほぐした糸の紡ぎかた⑨糸のよりかた等を教えていきました。

村人にとってはどれをとっても新鮮な出来事でありました。

韓家では毎日娘たちが集まり、笑い声が絶えませんでした。若者も来て話に加わり、自然と男女の出会いの場所になっていました。若者たちは朝になると花や野菜を持ってきては七人の姉妹を囲んで話し合い、時には歌い踊り恋の場にもなっていました。

韓姫たちは歌を詠むことにも優れており、村人たちに気持ちを歌で伝えることの大切さを教えてくれました。村人の中には自分の思いを詠むことができる人も出てきました。

・一人寝の床に入りて思い出す愛しき人の布織る音を

・布曝す白き輝き照り映えるそれより白き娘等の腕

・織姫の織りなす糸の緯糸に共に織られしわが愛心を

・一輪の野花を持ちて機場へと今日も渡せず野道にさしたり

・機織りの織りなす手先色白くてその手をそつと包みおたり

・旅立つ日愛しき人が縫い着物涙にぬれて乾くことなし

歌は幼稚であったが歌垣のように恋の思いを交わすことができるまでに成長していきました。

なかでも韓姫には多くの若者が彼女たちに心を寄せていました。韓姫は振る舞いがやさしく、束ねた髪に必ず野の花を挿していました。背が高く色白で、ほっそりとした体に麻布の衣服をまとい、大変美しい姿でした。

機織りは韓姫の家の前で行われました。六メートルの茅葺小屋を作りその下で五人一組になって布織は始められました。布が織られる最初の頃は、居座機(いざりき)でありました。一人で織るときあれば五人一組になって各々が分業して織る方法も取られました。韓姫たちはいつでも組になって行われました。それによって均一した美しい布となって織られたのです。

織の伝統を引き継ぐためには、一つ一つの経験が大切でありました。それらを体験することによって確かな技術を身に付けていきました。もつと大事なことは、多くの村人が集まり共同して生活していくことの大切さを学び合つたことでした。布を織ることは単調な世界でしたが、皆が話し合い、語り合い支え合つていくことよつて人の和の大切さを学んでいきました。新しい知識を学ぶことは生きる喜びとなつていきました。

機織りの手順は

前方の杭を打ち麻糸を縛り経糸6メートルの長さに延ばし、途中に箱を置いて約百本の糸を固定して並べ布幅が均一なるようにそろえました。ここで糸の太さ・薄さを分け・汚れを・取り除く作業が行われ、織る前の大切な役割を持っていました。村娘たちは韓姫たちと作業をしながら朝鮮・百済での思い出を語つてくれることもありました。

「私たちの百済国は滅びてしまいましたが、百済の仏教芸術は世界に誇る芸術でした。法隆寺にある百済観音も朝鮮からの渡来人によつて作られたといわれています。素晴らしい仏様です。私たちはそのことを誇りに思っています」

朝鮮半島では高句麗、新羅、百済、中国等の間で幾度となく戦いが続いておりました。戦いの度に人は苦しめられていました。家族はバラバラになつていきました。

戦さはむごいものです。私たちはお釈迦様が求めた「憎しみ合うことのない国になつてほしい」と願っています。此処麻績の地でも、平和な世の中が続くようにしたいです。

韓姫は「布を織るときは一つ一つの作業を丁寧にやつてくださ」と口癖のように言われました。

「布を織ることは心を織ることです。経糸と緯糸がしっかりと絡み合わせることが大事です。その二つの糸の絆を強固なものに織りなすことです。これが布を織るといふことです」

と、機を織る前には必ず話してくれました。それから機織りが始まりました。

揃えられた経糸は横櫛の間を通されて均一に揃えられました。織る前に刷毛で糸を湿らせ糸が切れないようにしてから綜統(そうこう・経糸を上げ下げさせる操作に用いるもの)へ導いていきました。

最後に韓姫は二回音「トントン」と緯糸を締めるのでした。その音はかるやかに響いていました。

韓姫の「トントン」と締め付ける音には

「糸は確かな絆で結ばれましたか」

「心と心が織られましたか」

と、いう願いが込められていたのです。

「織るとは布が出来上がるということだけではありません。朝鮮と日本の結びつきの絆を織っていることにもつながるのです」とおっしゃいました。

こうして、この里では韓姫のおかげで麻づくりが盛んになり、人々の生活も豊かになりました。人々はこの地を「麻績」の地と呼ぶようになりました。

エピローグ

七廻塚古墳には非常に精巧な石劔(いしくろ)と呼ばれる腕輪形ものが出土しています。また滑石製「立花」が死者の石枕の周りに10個挿してありました。

「立花」とは石で作つた花です。生前韓姫がいつでも髪に差していた野の花を死後も花で美しく飾つてあげたいという村人の思いが伝わってくるようです。

韓姫は死後も村人とともに生きたいという心根が「機織りの音」を鳴らしているのではないのでしょうか。(完)